

地域での伝承

「太鼓水」

大水のことを、「太鼓水」といいました。大水になると、堤防に祭り太鼓を出して、叩くのです。この太鼓が鳴ったら、お寺や学校に避難したものです。

いつ太鼓を叩くかということは、区長が判断しました。区長が消防に伝えます。各組に水防係というものがいて、消防だけでは回りきれない仕事をするようになっていきます。本庄は十八の組みに分かれているので、各組一人ずつ、18人の水防係がいます。



「シブキ」

「権現さんあたりがあぶない。堤防が切れそうだ」というと、宮の前あたりの大きな木を切って、川の中へ投げ込みます。「シブキ」を築くのです。

堤防の下の方は皆蛇籠に山石を詰めたものを入れて、補強していたときもありました。そうしてあると、水はくぐるけれど堤防が切れるということはないということです。

昔は、「川の端の木は切るな」といわれていたものです。大木は、水害のときのために
 っておいたのです。

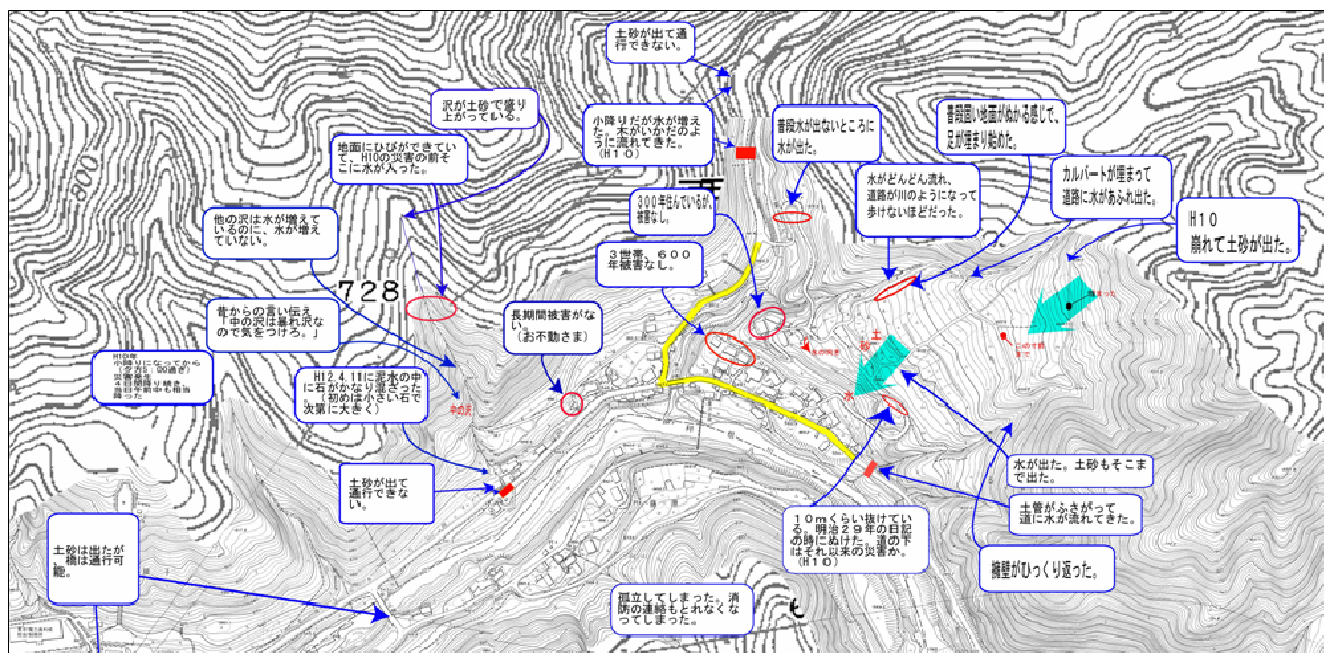
写真) 昭和28年13号台風による愛知川の浸水状況
文章) 字誌「ふるさと本庄」(彦根市本庄)

49

①リスク情報の共有化

地域に伝わる言い伝えの集約 (群馬県水上町)

- 過去の災害時に、どんなことが地域に起こったのか？
先祖から地域に伝わる『言い伝え』などをマップ上に記入



出典：防災講演会（群馬大学大学院片田教授）資料の転載 50